

○日時

令和3年6月21日（月）9：30～11：30

○場所

オーテピア4階 ホール

○出席者

別紙出席者名簿のとおり

○開催内容

1 開会

県立図書館館長あいさつ

新任委員紹介

議事録署名人の選出

2 議事

(1) 令和2年度事業実績及び令和3年度事業計画について

(2) オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会について

(第2期オーテピア高知図書館サービス計画の策定について)

(3) その他

3 閉会

市民図書館館長あいさつ

○議事録（※議事内容について事務局から説明後、意見交換）

(1) 令和2年度事業実績及び令和3年度事業計画について

(委員)

多様な分野について多様な視点からの取組をしっかりと行っている。職員は大変ではないだろうか。働き方改革は大丈夫だろうかと思った。

また、高知県は全国都道府県の中でも最も蔵書数が少ない。図書館運営において苦勞が多いのではないかと。それに加えてコロナ禍の中にあるが、いろいろなアイデアで、それに負けないような取組を行っている。

先日、私も初めて3年生の子どもたちと一緒に図書館見学に来た。なかでも、1階のオーテピア高知声と点字の図書館は、普段あまり見ることがないので、興味深く関心を持って見ていた。これからももっと時間をかけて、子どもたちにはオーテピア高知声と点字の図書館へ足を運んでもらいたい。3年生の福祉の勉強、障害者理解教育にも関連があり、そういう意味でも大事にしていきたい。いろいろな説明を分かりやすくしてくれた。

今度来るときは、実際に本を読んだり、読み聞かせを経験したりしたい。実際に見学時に図書館を活用することで、子どもたちが主体的に図書館に行こうと思うだろう。今大きな課題であるのが、今年度から『高知のくらし』という社会科3年生、4年生の副読本が変わり、その中に図書館はなくなったことである。最後にチラッとはあるが、1学期は高知城から見る東西南北の風景、高知市の街ということが中心になり、オーテピアが全然ないわけではないが、あえて見学をする必要がなくなりつつある。何らかの形で

やっていきたいと思っている。

(委員)

オーテピアができて、図書館に行くようになった。以前は、「図書館は暗くて閉鎖的」というイメージがあって、子どもの頃から苦手なところがあった。ところが、オーテピアは明るく開放的で入りやすい。そのように感じていて、結構、主人ともども借りにきている。

マンガでいろいろなことにアプローチしている。行政支援サービスとか、先ほどの移住者とか。今、歴史の本などもマンガで出ていて、若い人にはマンガだとすごく入ってくる。私たちの頃は、絵物語だったが、先ほど外国人や知的障害者へのサービスの話があったが、マンガはこういう方たちにも分かりやすいのではないかと思う。

それから、労働関係の本の利用が増えたとあるが、主人が労働分野に関係する仕事が多く、そういうことで借りに行っている。また、ボランティアでいろいろやっていて、それに関わる多くの本を借りていた。マップなどの情報量を期待していた。

(委員)

私は教育の立場で、限られた時間なのでかいつまんで話す。

まず、教育は、社会が変わればその内容が変わるもの。令和の学校教育といったものが出され、その内容には個別教育の重視や協働がある。今後の教育は、未来を夢見て、課題解決に向かっていく子どもたちのための教育。そういった内容から見て、図書館の役割は非常に大きい。そのような中で、このオーテピアの取組は充実している。第2期サービス計画(案)を見たが、緻密に、もれなく社会の変化に適応している。例えばコロナ、それから仕事、障害、教育。そういった適切な視点で蔵書を増やしている。全国から見ると蔵書は少ないが、質の高さが見て取れる。

あと、県立高校のことが出たが、県立高校も県の端から端までである。近隣の学校は大いに利用できる。県立高校の全ての子どもたちが、時間を要せずに、オーテピア高知図書館の必要な資料を調べ学習などで利用できるよう、いろいろな施策は講じているだろうが、何かまだできることがあるのではないかと思う。オーテピアの取組には、高知県のこれからの社会を変えていく一つの大きな役割があると思う。

(委員)

私は家庭からということで話す。オーテピア高知図書館をよく利用していて、予約をして借りたり、返しに行ったりするのがとても楽。近くの図書館まで届けてもらえる。あと、最近アプリの読書通帳が溜まるのを楽しみに見ている。

コロナ禍で去年から利用をためらう方もいる。学校の司書の先生に聞いたが、今の若い世代は潔癖な子が増えていて、図書館で本を借りることに抵抗がある子も多いとのこと。図書室の本も同様に、借りるよりも買うほうを選ぶ子も割といるという話があった。コロナ禍において、貸出本の消毒などはどのようにしているか聞きたい。

また、読み聞かせの会なども4月から6月の間休止していたが、現在は再開している。そのときにどのような工夫をしていたかも聞きたい。高知こどもの図書館でも、昨年以降はお話し会をまったくやっておらず、今年度は再開していく方向である。どのように安全に、安心して参加してもらえるか、やり方を

教えてもらいたい。

中2の息子から、オーテピアはきれいで魅力的だが、去年、中学生になって友達と利用しようと来たときに、椅子の数がとても少なく、以前と比べてシーンとしていて、ゆっくりと談笑しながら見たりしにくいと聞いて、残念に思った。この状況が早く明けて、誰もが利用しやすいようになってほしい。

あと、受験生は学習室が非常に役に立った、利用させてもらってありがたいといった声を多く聞いた。

小さな子どもや赤ちゃんがいるお母さんたちは、いつ外に出ていいか分からないとか。子連れで外に出ることに不安を感じている母親が多くいる。引きこもって子育てしている方が思い切って土日に本を借りに来たが、結構人が多く、密だったのですぐ出てしまったという話も聞いた。せっかく図書館に来て、楽しく過ごしたいというニーズがあるのに、コロナでかなわないということが非常に残念と思っている。早くこの状況が良くなってほしい。

(司会)

コロナ対策、安全性の確保について、具体的な事例を挙げての質問であり、事務局からコメント願う。

(事務局)

コロナ禍で、図書館に来ることをためられる方も多いと思う。入口には消毒液を構え、それから、1階に検温器を設置している。人を置くことまではしていないが、確認をお願いしている。

また、小さなお子さん以外はマスク着用を必須にし、かなり厳しくお願いをしている。本の消毒については、県内を含めて小規模の図書館で本の消毒機をおいているところもあるが、オーテピア高知図書館では1日に動く本の量が多く、1冊ずつの消毒ができていない状況にはない。

消毒機を入れるか入れないかということについては、開館準備の段階でも協議された。貴重本も所蔵しており、消毒機に入れると紫外線で本が傷んでしまう可能性もあり、導入されなかった。衛生面では、本の使用前、使用後は必ず手を洗うよう周知している。

罹患者が本を借り、返却する可能性もあり、そういった場合、バックヤードで消毒することについて検討を進めている。結果が出たら、報告したいと思う。

読み聞かせについては、人数を制限し、ソーシャルディスタンスをとりながら行っている。また、学習室のことについて話があったが、土日の利用が確かに多い。コロナ禍となる前は、土日の来館者数は1日4,000人を超えたが、現在は3,000人くらいで、少なくなったとはいえ、それでもこれだけの来館者がいる中で、学習室の希望は高いにもかかわらず、ソーシャルディスタンスを取るため席数を半分にしている。このため、土日は、学習室の上のM5階を開放し、臨時学習室として使ってもらおうこととしている。

(事務局)

先ほど委員から意見があった県立学校等への支援について話す。3月の協議会でも少し話したが、県立学校だけではなく私立の高等学校も含めて訪問している。

学校図書館の司書に話をしても、さらに次のステップへの連携につながり難いので、私も同行して校長に話をするようにしている。その結果、学校図書館への貸出数は、元年度が690点くらいだったが、昨年度が約1,500点と倍増している。さらに、学校との連携に関しては、来月、県教委の高等学校課が産業系の高校の特色や魅力を図書館でPRするイベントをオーテピアで開催する。その中で、職業に必要な能力

とか資格とかについて、図書館ならではの情報を提供していくということで、県教委、学校、オーテピアが連携した取組もはじまっている。

また、次期サービス計画では、それぞれの学校ごとの特色に応じた連携を強化していく旨、盛り込んでいる。県立学校は高校だけではなく特別支援学校もあり、そういうところとも取組を進めていきたい。

それと、委員から話があった3、4年生の副読本『高知の暮らし』の中に図書館の記載がなくなったということだが、それは県教委が作ったものか。高知市教委か。

(委員)

高知市だが、市教委ではなく、高知市社会科教育研究会が独自で作ったもの。最後の方にはオーテピアの紹介があるが、今までのような深い内容ではなくなった。しかし、国語で図書館の学習があり、それとオーテピアでの説明が合致しているので、そういう意味ではいろいろなことができると思う。もっと細やかに連携を取っていけば、さらに深まるかもしれない。連携を取りあって教材開発をしていくようなことを期待している。

(司会)

委員から乳幼児を連れてきた母親の戸惑いについて指摘があった。スペースの確保は難しいかと思うが、何かできることがあれば。例えば、トイレの赤ちゃんを座らせたり寝かせたりするスペースとか、ああいった安全なスペースができる限り確保できれば利用しやすいかと思う。大変だろうが、具体的な指摘なので、少しでもそういうスペースを確保できるように努力願う。

(委員)

図書館利用に障害がある方へのサービスについて述べる。オーテピアが開館してから3年経ち、1日の貸出数を見ても、認知されてきたのかなど。利用しやすくなった、ハードの面で十分バリアフリーになってきたということが非常に大きいと思う。

宅配貸出サービスの実利用者が9人というのは、少ないかと思う。全県下を対象にしたものだとすれば、もう少し利用してくれてもいいかと。この辺は、その人たちに行き渡る宣伝はなかなか難しいかもしれないが、そういったサービスがあるということをしっかり伝えてもらいたい。

それから、物理的に読書をするのが難しい方たちもいる。インターネットだとかパソコンだとかが普及した時代なので、画像を撮って貸出しができるようなシステムといったものがあればと思う。著作権上、難しいとは思いますが、家にいながらオンラインで読書ができれば非常にありがたいだろう人たちがいるはず。その辺で、図書のますますのバリアフリーができるのではないかと思う。

(司会)

非常に重要な指摘をいただいた。事務局からコメント願う。

(事務局)

委員のおっしゃるとおりだと思う。特に、インターネットでの閲覧については、コロナのこともあり、県立図書館の電子図書館が非常に伸びている。障害のある方への情報提供においても、利用が大きくな

ってくると思う。

また、正式には7月になってから情報発信をする予定をしているが、トライアルではあるが、雑誌等を閲覧できるような仕組みを構えようとしている。楽しみに待っていただきたい。

(事務局)

著作権法が改正され、著作物、複製物をインターネット等で送る公衆送信ができるようになったが、補償金を払うことになる方向である。文化庁が検討している方向性だと、図書館に補償金のための予算が付くことはまずない。そのため、利用者に転嫁する方向で検討が進められてしまっている。おそらく補償金となると、コピー代のような10円、20円みたいな感じでは済まないと思う。著作権についての補償金となるので、よい面もあると思うが、危惧しなければならない面もあるというのが現状である。

(事務局)

話にあったとおり、バリアフリーサービスの宅配貸出サービスの実人数が9人というのは、まだまだ不十分。昨年実施したアンケート調査でも、このバリアフリーサービス自体の認知度が低かった。そこは真摯に受け止めており、さらにサービスの認知度を上げていく取組として、市町村の窓口で障害者手帳を交付する際に、バリアフリーサービスのPR用のチラシを配布させてもらったり、学校や団体に直接訪問したりして、このサービスをより認知してもらいたいと思っている。

それと、電子書籍について県立図書館として行っている事業だが、昨年のコロナ禍の中、利用者、閲覧、貸出しが非常に大きく伸びてきた。その中には、読み上げ機能に対応したものもあり、バリアフリーサービスと合わせてさまざまところでPRを強化していく必要があると認識している。

(委員)

ビジネス支援という立場でこれまでの取組の感想や向こう1年間の取組に向けたコメントをする。

一つ心配としては、これまで「ビルド、ビルド、ビルド」で来ていて、業務が非常に増えてきているのではないかと思う。そういう意味で、「スクラップアンドビルド」、スクラップするところはしっかりスクラップしてもらおうということを、現場の職員というよりは館長はじめ管理職の方々に考えてもらいたい。その辺は、うまくマネジメントしてもらいたいと思う。

本題として、今ウィズコロナという状況がある。制度融資などもあり、企業は、今のところ、資金的にはもっているというところだが、これから1、2年で借入金の返済がはじまっていく企業が多数にのぼる。そういう企業をどういう人が支援しているかという、経産省に認定支援機関という制度があり、その経営支援機関に、例えば商工会、商工会議所、税理士、会計士、それから我々のような経営コンサルタント、そして銀行が入っている。

借入金の返済に困ったときに誰に最初に相談するかというと、銀行に相談をする。銀行では、「じゃあ経営改善計画を立てましょうか」ということになる。経営改善計画を立てようとする、まず何をするかという、現状分析からはじめる。外部環境分析、内部環境分析からはじめて、どういうところが苦しくなっていて、どういうところにチャンスがあるのか情報を収集していく。銀行はそれなりの情報収集機能を持っているので、いろいろな情報を収集していくが、まだまだ自分たちでは見えていない情報があると思う。

そういった際に、オーテピア高知図書館と特に銀行を中心とする認定支援機関とが、必要な情報をすぐにもらえるような密な関係ができれば、これからの1、2年、高知県の事業者にとってすごく強みというか、ありがたい存在になっていくのではないかと思う。特に、銀行との関係性づくりに取り組んでもらいたい。

もちろん、経営の行き詰まりだけではなく、このコロナを逆にチャンスにして、追い風にして新規事業を展開していく企業もたくさんある。そういう際にもまずは情報収集からはじまるので、そこに対してすぐにつながるような、そういう状況をぜひ何らかの形でつくってもらいたい。

そのために、まずは商工会や銀行との勉強会とか、関係づくりに向けた顔の見える関係をつくっていかないといけないと思う。網羅的にやっていくのは、限られたパワーではできないと思うので、いかに効果的に、効率的にその関係をつくっていきけるのか、戦略を持って考えてもらいたいと思う。

先ほど、「ビルドアンドビルドは辛い」と言ったが、さらにまたビルドのようなコメントをして心苦しいが、ここ1、2年が企業にとっては本当に勝負であり、ぜひ頼れる存在としてオーテピア高知図書館の力を発揮してもらいたいと思う。

(司会)

ビジネス支援において、情報提供だけではなく実際の、具体的な支援にどうやってオーテピア高知図書館が関わることができるか。その辺り、事務局の考えをコメント願う。

(事務局)

これまでに、商工会や中小企業団体中央会、産業振興センター等とは、すでに関係が構築できているが、銀行という視点はあまりなかった。例えば、資料をつくる際、現状分析するのにどのような情報が必要かということをおおまかじめ図書館側が分かった上で、そういう資料を集中的に集めることが効果的ではないかと思う。できれば今年度からでも取り組んでいきたい。

コロナ禍の中、転業、転職は非常に多くなるのではないかと想定している。次期サービス計画にも盛り込んでいるが、サービス計画の策定を待たずに今年度から仕込みをしていきたいと思っており、そういう情報も積極的に収集していきたい。

それと、心配いただいた「ビルド、ビルド、ビルド」について、今、業務が増加しているのは事実だが、例えば、図書館見学のときに毎回、司書が説明していたことを動画にすることで効率的にする。あるいは、先ほど説明した『南路志』や『憲章簿』、これらの資料のレファレンスは資料の全体像が分かっていないと、1件に対して時間やエネルギーがかかるが、そういった資料をデジタル化し、利用者が自分で検索できる機能を設けることによって、業務負担の軽減につながるなど、デジタル化等のいろいろな形で効率的に業務を進めていきたいと考えている。

(事務局)

おっしゃるとおりだと思う。科学館では、コロナを逆手に取って新たな仕事につなげていくということについて、コロナ関連対応のさまざまな機器をつくっている県内企業の情報を提供している。そういったことについて、強みを押し出しながら図書館としてもバックアップをしていきたいと考える。

(委員)

全国的にワクチンの接種がはじまってきているとはいえ、コロナはいつ収束するか分からない。全く先が見えない生活の中にも、いつの間にか新しい当たり前とか新たな常識とか、生活の様式ができてはじめてきた。オーテピア高知図書館サービス計画も5年目の節目を迎え、今はまだ完成の一步手前というところではあるが、計画策定に向けての資料を読ませてもらい、ご苦労様という思いだ。

経過の中で、コロナ感染症の影響も少なくないが、目標まで伸び悩んだサービスがあったり、感染症拡大を契機に、天候や距離を気にせず誰でもいつでも利用できるメリットのある電子図書館の登録者数が増え、貸出しが急増したりもした。また、5年間を振り返って、認知度はあっても十分に利用に結びついていないことも見えてきたので、それぞれのサービスの課題は、取組を継続する中で、今後の成果につなげていってほしい。

(委員)

コロナの状況であっても順調に進んでいると考えている。特に、個人の貸出点数は順調ではないかと思っている。毎回、非常に感動で感慨するのが、市民図書館分館、分室の貸出点数である。105万7,512点ということで、本館を上回っている。全体として、234万強の貸出しが達成されている。これは移動図書館の効果が非常に大きいと思う。

まず、近所で図書館に行ける。近所で本を借りられるという基盤、市民図書館が長年やっている分館、分室という「背骨」が非常に機能している。それと、本体のオーテピア高知図書館との連携がうまくいっていて、高知市の中心街等の読書環境が非常に進展していると思う。今後は市町村図書館の進展と学校図書館との連携を期待する。

もう一つ感動したのは、先ほど説明があった、県関係の図書で『南路志』と『憲章簿』のデジタル化ということ。普通はスキャナーでスキャンしてPDFにするが、これはテキストデータベースになっていて、画期的である。テキスト化されていれば、高知県の歴史とか、あるいは法律みたいな文化というものが全国的に広がっていくきっかけになるのではないかと大いに期待をしている。

第1期サービス計画はなかなか大変なところもあるが、順調に進展はしている。今後、第2期で今いただいた意見を反映させてもらいたいと考えている。

(司会)

事務局からコメント願う。

(事務局)

市民図書館の分館、分室の貸出しが本館を上回っているということについて、そういった意味では、近所で本を借りられるということには、誇りに思っている。

昨年度は市役所の新庁舎にも返却ポストを新たに設けた。借りるだけでなく返す場所を増やしていくということについても、利便を高めていきたいと思っている。

(司会)

テキストファイル化に関して、コメント等はあるか。

(事務局)

『南路志』『憲章簿』は1冊の本ではなく、『南路志』だけでも、資料集なので十何冊ある。だから、相当な規模になると思ってもらいたい。具体的には、テキストで検索すると、テキストの字が出てくるのではなく、該当ページの写真、本を開いたイメージが出るようになっている。

ただ、残念ながら、検索した語句を反転するといった機能は持たせられなくて、結局そこは見なければいけない。

今まで、一生懸命ページをめくっていたのに比べれば、はるかにいろいろ出るので、ぜひこれを研究に活用してもらいたい。

(司会)

多くの研究者、それから興味のある方の利用が期待できる試みであり、期待している。全体の意見としては、順調に活動を続けているという判断が多かったと思う。ただ、指摘いただいた点、改めるべき点もあり、その辺りをよく事務局のほうで検討願う。

(2) オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会について

(第2期オーテピア高知図書館サービス計画の策定について)

(司会)

何か足りない部分や方向性に問題があるかもしれないので、指摘願う。

(委員)

多様な分野において、さまざまな取組を計画していると感じる。このことをやはりもっと知ってもらわなくてはいけない。自分たちが伝えていく方法はないだろうかと考えていた。

例えば、高知市であれば毎月の校長会を、年に1回オーテピアで行い、オーテピアの取組を簡単に説明するような場を設け、直に各学校長に感じてもらえるようにしたいと思う。これはオーテピア高知図書館にお願いすることではないかもしれないので、市教委と相談し、オーテピア高知図書館とも調整できたらと思っている。

(委員)

サービス計画というより、先に言い残したことについて述べる。子どもを育てていて、今の若い人が潔癖だと感じている。将来的に図書館の利用者を増やそうとするとき、若い人の感覚を変えなければならないと思う。

そのために、科学的な視点から、若い人に図書館の本は汚いのかということを考えてもらいたいと思う。例えば、科学館などとコラボして、コロナウイルスが紙に24時間残るのか、消えるのかといったことを科学的に計測して。すべての菌について調べることはできないだろうが、既に調べたデータがあるかもしれない。そういうことを若い人に展示で知ってもらえたらと思う。他にも、学校などと協力して、知ってもらえれば。汚いという思いがあるために図書館へ行かないのなら、もったいないことなので、データとして知らせたら分かってもらえるのではないかな。

(司会)

全国の図書館でそのような調査をした例はあるか。

(事務局)

そのような調査はないと思う。東京の図書館の本に比べたら、利用度が違っているので、当館の本はきれいである。また、外国の図書館は日本ほど図書館の蔵書をきれいにコーティングしない。日本の公共図書館は、手間や時間を含めて相当なコストをかけて、独特な素材でコーティングしている。

心配であれば、コーティングの上からアルコールなどで拭いてもらって構わない。拭いてもらえれば十分きれいになると思う。

(委員)

2点述べる。1点は、ICTがここ1、2年で小中学校、高校で整備され、遠隔教育が行われるようになってきている。そういった中で、図書館の利活用を各課と連携して検討しているとのこと。そのような形でサービスを提供することは、子どもたちに有意義な時間をもたらすと思う。

最近の生徒は、インターネットで学校の特徴を調べ、進学する高校を選んでいる。例えば、山田高校では、クラブ活動だけではなく、海外との交流が盛んであるといったことをインターネットで知り、県外から生徒が来たという話を聞く。そういう調べ方をかなりしていると思う。そういったことを、職業の選択などにもつなげるよう発展させてほしいと思った。

もう1点は、市町村図書館との連携について、オーテピア高知図書館の取組は先進的ではあるが、市町村の現場で、そのすべてが生かされているかという点、自治体によって差があると思う。そこを、県内全域に対して、図書館の魅力やサービスについて徹底的に伝えることによって、各市町村が自分たちで施策を講じたり、改善したりするということが県全体に広まるのではないかと感じた。

(事務局)

1点目、遠隔教育やICTについて、電子図書館のアカウントを県内の全小中高生に配布して、電子図書館を見られるように、県の教育政策課とも調整を進めているが、各市町村教委を通じて各学校に話をおろし保護者の同意をもらう、そこがネックになると現状では聞いている。当初、想定していたよりも容易ではないことが分かった。それさえクリアできれば、市町村単位で子どもたちにアカウントを発行し、みんなが電子図書館を見られるようになると期待している。

青空文庫には著作権切れの多くの本がある。高知県電子図書館に登録しなくてもインターネットで見られるが、高知県電子図書館からもリンクを張り、そこから青空文庫に入れるようにする。また、青空文庫の本の中から、司書のおすすめの本を紹介していくように準備を進めている。

2点目の市町村との連携については、自治体によって温度差があるのは事実だと思う。今後建物を新しくしたり、リニューアルしたりすることを検討している市町村がいくつかある。箱物だけではなく中身が大事だと思っているので、そういうところに参画し、内容の充実について支援をしていきたいと考えている。

(委員)

きめ細かい計画を立てて、いろいろなサービスを予定しており、それらのサービスを利用したいと思った。

ティーンズ・サービスについて、オーテピアティーンズ部の部員を公募するということだが、中高生の約9割がスマートフォンを持っているとのデータがある。オーテピアアプリの情報を周知していったらよいと思う。子どもたちにはまだ知られてないサービスがたくさんあると思う。

ICT化、SNSを通じたサービスという話があった。フェイスブックやツイッターはあるが、インスタグラムはやっているか。「今の子どもは、フェイスブックは見ない」と言われた。時代はインスタグラムになっていて、さらに先に進んでいるのかもしれない。いろいろな商売や事業をはじめるとしても、知ってもらうにはまずインスタグラムと言われているので、検討してはどうかと思った。

(委員)

突き詰めていくと、非来館型のサービスに向けての充実というのが大前提になるかと思う。ただ、やはり図書館に来て読書を楽しむということもなくならないと思う。その辺を含めて、方向性が非常に難しいと思った。

ただ、選択の多様性があるのは非常にありがたい。ぜひ両立に向けて頑張ってもらいたいのと、来館して楽しい図書館にしてほしいと思う。

先ほどスマートフォンの話があった。昔は、レコード盤で音楽を聴いていたが、今はほとんどダウンロードしてスマホで聴いている時代であり、もしかしたら図書もすべてインターネット上で済んでしまうような時期が来るかもしれない。便利なのはよいが、本を見て楽しいとか、図書館へ来たらワクワクするといったことがなくなってしまうのは寂しい。そこは続けてもらいたい

(司会)

非常にデリケートな意見であり、事務局から説明願う。

(事務局)

非来館型サービスの充実は、コロナ禍において進めていく必要があるかと思うが、オーテピア高知図書館は「ハイブリッド型」という紙と電子の両方、両輪でやっていく図書館。多くの方々に来館してもらい、ワクワクするような経験をしてもらいたい。多くの本を手にとって楽しんでもらいたい。

そもそも「会話ができる図書館」とのコンセプト自体がハイブリッド型であり、決して紙媒体の資料がなくなるわけではない。オーテピア高知図書館としては、紙の資料を重点的に収集していくことが大事だと考えている。

(事務局)

ハイブリッド型図書館は、現在、技術的にはできる。コンテンツを入れてしまえばよいだけなので。現状そのようになっていないのは、経済的な理由があるため。著作物は知的な生産物であり、それによって暮らしている人が当然いて、出版社はその典型である。全部フリーでよいことになってしまったり成り立たない。

それから、インターネットの情報で全部分かるという人もいるが、そうではない。情報格差について言えば、今、日本では、インターネットについてはほとんどない。情報格差が歴然と表れているのは紙の情報資源である。紙の情報資源が今でも圧倒的にたくさんある。年間8万点近く本が出ていて、雑誌だけでも3,000とか4,000とかある。今、日本で情報格差が激しいのは紙の情報資源であり、オーテピア高知図書館はハイブリッドでそれを補いたい。恐らく、20年とか30年とかかかる過渡期だと思っているので、当面は両方でハングリーにやっていきたいと思っている。

電子書籍は2010年ぐらいから普及してきて、市場規模は拡大しているが、全体に対する割合は依然低い。急拡大しているが、その内容のほとんどがコミックである。紙の本のコミックはあまり見なくなっていると思う。非常に有名な漫画雑誌で廃刊になったものもある。

漫画は電子書籍にかなり移行しているが、いろんなデータで見ると限りでは、いわゆる紙の本はまだ売れている。雑誌は売れなくなっていて、出版社が困っている。雑誌や漫画が電子化されて、電子化された漫画は売れているから、今後も変わっていくと思う。今はそういう状況だが、20年から30年後には確実に変わっていくと思う。

(事務局)

インターネットで文字を見るだけでなく、音声で聴くということに関して、AIの進化がある。今、都市部では、通勤時間に紙の本を読む代わりに、インターネットで音声を聴いて本を読む状況があると聞いている。市場規模もここ10年で、100億から1,000億になるのではないかと言われている。

活字本との違いは、活字だと自分で読んで頭の中で映像や風景を思い描くが、音声だと読んでいる人の、合成音声であっても声色があり、ある意味一定の条件で頭の中に入ってくる。やはり、活字を大切にしながら音声も取り入れていくということになると思う。

リアルな図書館サービス、来館しての楽しさということについては、さまざまな展示物、それから「プッシュ型」という呼び方をしているが、時期にあわせていろいろなイベントをかませることによって、新たな切り口から本を提供していくということもある。リアルとネットの両方で頑張っていきたい。

(委員)

これまでの検討会の内容を加味してもらい、ありがたいと思う。中期計画になると思うので、将来的なところも考えながらコメントする。

具体的な話だが、高3の息子が間もなく受験し、おそらく県外へ出ていく。県外に出て、いろいろなところで活躍してほしい一方で、高知に帰ってきて、高知県の産業や経済に尽くす人になってもらいたいという思いもある。

昨年、研究を一緒にしている、とあるチームが、なぜ高知にUターンしてこないのかいうことを調べたりとか、他県と比べたりした。沖縄県と高知県を比較すると、沖縄県の場合、圧倒的にUターン率が高く、高知県は、全国的に見たらUターン率が高いが、沖縄県と比べると低い。

その原因を考えたが、帰ってきたくても、働けるところがないという側面もあるが、多くは高知を知らずに出ていくという側面があるのではないかと。「高知を知る」ということを高校卒業までにしっかりやっておくということが大事かと思う。

オーテピアは「知の拠点」と認識している。「知」というのは、「知る」ということと「知る能力を付け

る」という二つの側面があると思う。まずは、その高知県をしっかりと知るという場を、オーテピアが中心になってつくっていくということが非常に大事ではないかと思う。

一言で言うと、キャリア教育ということになるかと思う。例えば、ビジネス支援サービスとティーンズ・サービスの組み合わせで、県教委とキャリア教育をやっていく。文字情報で高知県の企業について知る。あるいは、人の口、例えば企業の経営者、働いている方々から知る、といったいろいろなやり方があると思う。そういう「知る拠点」という意味でのオーテピアの機能があつたらよいと願う。ぜひ、「戻りがつお」を育てていくオーテピアになってもらいたい。一緒にそうしたいと思っている。

(委員)

市内では、分館や分室、移動図書館。そして、県内では、各地の図書館の方々が頑張っている。今も図書館の建替があり、新しいスタイルの図書館もできているようだ。それぞれに地域の事情や独自性があり、同じようにということにはなかなかないと思う。オーテピア高知図書館は、その地域の独自性に応じたモデルとなって、県全域の図書館サービスを展開していってもらいたいと思った。

そして、先ほども触れたが、知っていても利用につながっていないということについては、積極的に情報を発信して、広報活動をするにあつたが、実際に使った方、利用した方の満足度が高ければ、その方がPRの元になると思う。よいお店に行ったら、またそこに行って買いたい気持ちになるように。図書館を使ってみてすごく良かった、とても親身になって調べてくれた、本当に信頼できるということを感じたら、また来たくと思う。そして、近くに何か困っている人がいたら、「こんなのがあつたよ」などと宣伝してくれる。その人自身がPRの核になってくれるのではないかと思った。

(委員)

毎回この協議会では、各委員から新しい考え方を語ってもらい、非常に勉強になる。

まず、来て楽しいということ。図書館は生涯教育。教育が非対面でできるのかということ、コロナのこともあり、世界的に議論が活発になっている。人間、非対面で教育され得るのかというのは非常に大きな課題である。教育がコミュニケーションによって成立するということからすると、今までは相互プロセスのない非対面のコミュニケーションで日常を暮らす経験はほとんどない。そういった意味で、新しい課題である。ネットでの会議ツールや授業ツールがあり、大学でも非対面の講義をしているが、その効果はまだ分からない。

だから、技術的には相当程度できているとは思いつつも、果たして図書館の果たすべき役割を電子的に果たせるかというのは、実は自信がないところである。やはり、従来型の図書館のスタイルを基本としながら、まさに「ハイブリッド型」で進展していくのだろうと今は考えている。

それから、「高知を知る」というのも非常に興味深い視点と思う。これを知ることによって、知的基盤が充実していくと思う。それによって、若者が県内に残るかと言われれば、その点はまた別の話だが、オーテピアの一つの役割になっていくと思う。

それから、口コミの話というのは非常に興味深いところ。来館者数だけを見ると、割と多くの方に来てもらっているという気はしている。40代の利用が多いということの逆で、いろいろな世代に来てもらえるよう考えなくてはならないと思う。

赤ちゃん連れの人が、密な場合に来館しにくいという話があつた。実は、第1期計画を策定したときか

ら、赤ちゃん連れの方は、図書館には来にくいのではないかという議論があった。子どもが泣くから迷惑ではないかとか、子どもを連れながら選書するのは大変だとか、そういった議論だった。第2期についても、子育て支援に関する取組がある。少子化をなんとかしたいという観点から、本で支援するのはもちろん大事だが、赤ちゃん連れの方が気軽に来られるような場所にするのも非常に大事だと思うので、今後も考えていきたい。

(司会)

各委員から意見を伺い、それから計画を改めて見直し、やはりキーワードは情報リテラシーとその向上と思う。ただ、掲げた目標は、セーフティネットの役割も果たそう、それから、情報弱者をつくらないようにしようという方向を打ち出しながら、リテラシーの向上にも資するという、言わば、矛盾を含みかねないものである。改めて、情報リテラシーとは何か、デジタル化だけを目指すものであるか否かという議論から始める必要がある。

今回のコロナワクチンの予約を見ていると、言葉は悪いが、デジタル化社会の情報リテラシーの偽善という側面が垣間見える。我々が想定しているような、電子化に対応できる情報リテラシーとは無縁の方々が結構いらっしゃる。その人たちがどうなっているか、そういうところまで考えた上で、情報リテラシーというものを考え直して、すべての方々のリテラシーを向上させるという壮大な計画を描いた。

もちろん、それは図書館だけでできることではない。情報というものの流れ方を図書館が一番よく、総合的に見ているということで、いろいろな関係者に、「こういう形でリテラシーの高度化を図りませんか」といった働きかけもできるような方向性を目指してもらいたい。それが、合築されたこのオーテピアの良さでもあり、情報というものを管理する図書館の今後のあり方だろうと思う。

(3) その他

(事務局)

今後のスケジュールについて説明する。資料6、A3横の一番下、「7次期計画の策定」のところを確認願う。現在、令和3年度6月で案が完成し、3つ上、「4図書館協議会」のところ、本日6月21日に開催し、議案として提出した。

本日以降のスケジュールについて、県、市それぞれの6月議会で説明したのち、7月上旬から8月上旬にかけてパブリックコメントにより意見を公募する。このときの意見を参考にした上で計画最終案を作成し、各関係方面に確認してもらう予定となっている。

次回の図書館協議会につきましては、8月後半ないし9月の開催を予定している。例年は明けて3月に開催するが、本年度は計画最終案を確認してもらうためこの時期に開催する。

開催方法については、今後の新型コロナウイルスの感染状況や例年と開催時期が異なることから、委員の日程が合わないということもあれば、書面による開催も考えている。

(司会)

意見も出尽くしたと思うので、ここまでとする。

本日も非常に盛りだくさんの内容だった。皆様の協力により、かなり突っ込んだ議論ができたと思う。事務局は、本日の意見や感想等をサービスの方針である計画の作成等、今後の運営に生かしてもらいた

い。

11時30分協議終了